

調査員の訓練は自分の鍛練？

筆者はここ数年、インドの農村やスラムで調査票を使った世帯調査を中心に行っている。通常、世帯調査では、調査の目的に応じて無作為に地域や世帯を選ぶので、だいたいの調査対象にとって我々は「一見さん」である。そのため、長期間にわたって同じ村に住みこんで行う調査ほど回答者は本音を語ってくれないと思う。また、回答者の話に我々が疑問を持って裏を取る手段が限られる。フィールドワークで直面する問題には、ほかにもいろいろあるが、インドの調査では、しばしばカーストとジェンダーに起因する問題に悩まされる。ここではカーストに関する失敗例を紹介しよう。

北インドの村ではカーストによる居住地域の棲み分けが広くみられる。とくに不可触民として差別され、村落社会の底辺に位置づけられてきた指定カーストは、ほかのカーストとは離れた部落に住んでいることが多い。あるときひとつの村で全世帯を調査して母集団を確定し、標本世帯を選ぶことになった。

その村の概要は三年前にも調査していたので、だいたいの世帯数が予想できた。だが、母集団を数えたら、世帯数は三年前の倍になっていたのである。なぜこんな急激に世帯数が増えたのだろうか。答えは簡単だった。前回調査では世帯数を把握するのに村長をはじめとする村の有力者らに選挙人名簿などをもとに世帯数を確認してもらった。その数の中に指定カースト世帯が含まれていなかったのだ。有力者たちの頭の中からは指定カーストの部落のことがすっぽり抜け落ちてしまっていた。結局、村の変化のうち少なくとも人口の推移を把握するのは難しくなってしまった。

いまだにフィールドワークではさまざまな問題に頭を悩ませ、試行錯誤を繰り返している身なのだが、これまで経験豊富な研究者や現地で雇用する調査員たちから多くを学んできた。ここでは筆者自身が行っている調査票を用いた調査の過程を簡単に示して、経験豊富な調査員たちから学んだことを紹介したい。

現実の人々の生活は文献に描かれる世界よりもはるかに複雑だ。だから文献調査を踏まえてある程度問題意識は絞っても、さらに実際に農村やスラムに出向いてインタビューを繰り返すし、問題意識や仮説を練り直す必要がある。それらを踏まえて調査票のドラフトを作成し、テスト調査を行って調査票の修正を重ねていく。その際、質問の方法や順番にも工夫が必要である。たとえば、世帯調査ではどこからいくら借金をしているのかという質問には通常なかなか正直に答えてもらえない。しかし調査員の知恵を借りながら試行錯誤の末、極端に収入が減った、あるいは支出が増えるようなできごとが一定期間の間にあつたかと尋ねれば、病気の治療費や娘の結婚持参金を工面するのがいかに大変だったかを意外なほど簡単に聞き出すことができた。その話の流れのなかで借金についても聞くことができたのである。

最終的に調査票を完成させ、

現地語に訳したらよい調査員の訓練である。ある程度のサンプル数を一定の期間内に終える調査の場合、すべての世帯に同行することはできない。そこで調査員を雇う。調査の質を決定するのは調査員である。調査員にすべての質問を正確に理解してもらおうこと。それが訓練で最も重要なのはいうまでもない。だが、訓練とはいっても調査員から学ぶことも少なくない。調査員たちの意見や提案をもとに質問票を修正することもある。たとえば、初めて公立校を調査したときのことである。学校を訪問して当日出席している生徒数を調べる時、出席簿を見せてもらうだけでは実際の生徒数を知ることができない。出席者数は地元行政官の昇進や給食費の分配に影響するので、だいたい過大報告される。それを調査員の指摘で初めて知って、実際に出席している子供たちを自分たちで数えることにした。

また、訓練の際には調査員に気づいたことや回答欄に収まりきれない情報について欄外にメモするように必ず依頼しておく。回答済みのすべての調査票に必ず目を通すようにしているので、入力されたデータには表

現在、インドの教育や労働移動に関心があり、スラムや農村で調査を行っている。共編著にS. Hirashima, H. Oda and Y. Tsujita (2011) Inclusiveness in India: A Strategy for Growth and Equality, Palgrave Macmillanがある。

れないこうした調査員のメモから調査対象への理解が深まり、議論の裏付けとして役立つことも少なくない。

さて、調査が開始したら、ベテラン調査員といえども新しい調査票に慣れるのには多少時間がかかる。訓練を十分に行ったとしても、調査員たちの間から必ず質問が出てくる。実際にインタビューをしたら村人から思わぬ答えが返ってきたり、調査員自身が質問の意図を十分に理解していなかったりするからだ。調査開始時には彼らに同行して質問に応じるだけでなく、できるだけ早く回答済みの調査票に目を通して、誰がどの項目を十分に理解していないかを確認する。最初は必ず二人ずつペアで調査に向いてもらうのが、調査に慣れたと判断されたところで、単独調査に切り替える。

おそらく企業調査ほどではないにしろ、スラムや農村の住民も喜んでインタビューに答えてくれるとは限らない。おしゃべり好きで知られるインド人でも、村の状況を惜しみなく語り尽くしてくれる人はそう簡単には現れない。村人があまり協力的でなかった場合、政府に調査への協力を依頼するレターを出

す、あるいは行政官や有力者に直接会って調査の許可や協力を取り付ける必要があるかもしれない。回答者からときには「その調査に協力することでこちらはどの得になる？」と詰め寄られることもある。「謝礼」を要求されることもある。調査に協力的な回答者であっても、自分の年齢すら知らない人々も少なくなく、とくに文字の読み書きのできない人々からの聞き取りには時間がかかる。さらに、非常にセンシティブな質問をしなればならない調査もある。村の学校で低カーストの生徒が席順や給食で差別されているのを知りたいときに、教師に「低カーストの生徒は差別されていますか」と質問しても、「カーストは全く影響していない」という建前しか出てこないかもしれない。どんな回答者にも不審感や不安感を与えず、粘り強く答えを引き出すにはどうしたらよいのか。それを学んだのは、コミュニケーション能力に長けた調査員からであった。

調査では予期せぬ事態も待ち構えている。ストや事故で道が封鎖された、河の氾濫で橋が流され村にたどりつくすべがないなど、調査を始めることすらで

きないこともある。また、冒頭で紹介した世帯調査では、土地所有面積を基準として全世帯をグループ分けし、各グループから調査世帯を選ぶことになっていった。ところが、肝心の土地について質問した途端に村人が警戒色を強め、予想以上に聞き取りに時間を要した。どうやら政府に報告すると思われたようである。また違う村では、調査中に盗難事件が起こり、普段見慣れない顔のわれわれ調査隊が犯人の一味ではないかと疑われた。経験豊富な調査員は、いかなる事態に陥っても機転を利かせて村人を納得させ、その場をうまく対処する能力を持っていた。

もちろん完璧な調査員など存在しないかもしれない。調査に慣れてくると相手によって回答がある程度予想できるので、なかには質問すらしない回答欄を埋めようとする調査員が現れる。彼らが待ち合わせ時間に来ないことも少なくない。なにせヒンディー語で昨日と明日はどちらも「カル」、一昨日と明後日はどちらも「パルソーン」

である。雨期に行った調査では、悪路のため村の手前までしか車が入れなかった。大雨で水位はすでに膝まで達している。こちらが覚悟を決めて道なき道を歩きだしたら、渋い顔をしていた調査員たちも車を降りてついてきた。結局、資金と時間の許す限り調査を一緒に行い、こちらの熱意を示し、彼らとの人間関係を着実に築くことでしか、調査員から学ぶことはおろか、質のよいデータは集まらないのかもしれない。



農村でのインタビュー（筆者撮影）